

アメリカでみた高齢者の自立

玄幡 真美

日本労働者協同組合連合会国際部

3か月だけの英語研修と思った北米への旅立ち。それが11年にも及んだのだが、様々な人種、宗教が異なる人達との出会いの中で考えさせられたのは、自立ということ。なかでも感心させられた、高齢者の自立についてふれてみたい。

帰国前カリフォルニア州バークレーでアパートをシェア(共同生活)したのは89歳のユダヤ系女性で、彼女の名前はモリといった。2歳の時ロシアから移民してきたが、幼児期に父母がなくなり、祖父母に育てられた。結婚してデトロイトに住んでいたが、夫と気があわず、子供たちのいるカリフォルニア州へと移ってきた。

長男は、オートバイ事故により死亡。娘は結婚し、カナダに住む。モリは、当初バークレーに住む二男のところに同居していた。が、彼に「自立しては」と言われたのが、彼女の自立・共同生活の始まりである。

残りの2人の息子たちは近隣地域に住んでいる。ずっと前、彼女がかぜをこじらせ3番目の息子の所に滞在していた時、彼が「ひきとろうか」と言ったら、モリは「バークレーに戻りたい」と頑として譲らなかったそう。そのことを確かめたら彼女は、なによりもアメニティーが豊かなバークレーをととても気に入っていること、郊外に住むと何をするにも誰かに頼らないといけないが、ここだとバスに乗って自由に買い物やユダヤ人コミュニティセンターに自分で行かれる、と誇らしげに語っていた。



そのとおり彼女は、毎週月・木曜日にセンターに行き、ランチを食べ、時折パン売りのボランティアをしては、売れ残りのパンをどっさり抱えて帰ってくる。そんな時には、私にも分け前がある。熱心なユダヤ教徒でもあるモリは、毎土曜日ユダヤ教会へ歩いていく(この日は車に乗ることが許されない)。午後、ラビ(ユダヤ教会の管理者)やその客人たちと食事をした折には、深夜に近い帰宅さえある。心臓が少し悪くなりかけており、2週間に1度ほど息子のメキシコ人の嫁が迎えにきて診察に出かけていた。「迎えにきてくれるから

医者に行くが、医者は好きではない」とこぼしていた彼女。私が出た後は、またアフリカンアメリカンの女性と共同生活を始めていた。

1人暮らしより、安全性のことを考えると、誰かと一緒に生活の方がいいと思う。「日本人には難しいかもしれないが、習うより慣れる」と共同(協同)生活の薦めを10

年前『公衆衛生』誌に書いた。狭い住宅事情もあるだろう。が、いまでも共同生活は増えていない。なぜだろう。それには何よりも、もたれあわない精神的自立が必要に違いない。自立してこそ、スムーズな共同(協同)生活が成り立つのだ。

高齢になってから自立を考えてみるのでは遅すぎる。親と子の自立——。それって、おなかの中にいる時から始めなくては！助産婦さんの役割の1つとは、そんなお母さん達(お父さんも)のモチベーションを高めサポートすることではないだろうか。